

回春病室

光田健輔 著



朝日新聞社刊

回春病室

章 田 洵 體 著

昭和二十五年十月十日印刷
昭和二十五年十月十五日發行

定價 百五拾圓

室病春回

— 教ライイ五十年の記録 —

著者

光^{みつ}

田^だ

健^{けん}

輔^{すけ}

發行者

杉

山

嵐

太

郎

印刷者

鈴

木

直

樹

發行所

東京都丸の内
大阪市中之島
小倉市砂津

朝日新聞社

印刷 日本寫眞印刷株式會社

自序

私はこの「回春病室」を出して下さる人々の御親切に對して感謝の言葉がありません。私は少年のとき兄の薬局で貧困の人の藥價を取り立てねばならぬことが嫌でありました。そんな医者にならぬようにと願つていましたが、医術開業免狀をもらつた後、医科大学で病理の一端を嚙つて見ると面白味を感じ、ついで東京市養育院の医局に奉職し、藥を賣らなくてもよいことになり、一安心いたしました。ここに人が嫌がるライ病の行路病者に逢い、これの治療および病理を研究

することに生き甲斐を感じるに至りました。

医学的には明治三十一年から四十二年九月まで入沢先生、橋本先生の内科の診断治療の指導を受けました。同時に養育院長澁沢子爵や養育院幹事安達憲忠先生からライ患者の隔離方策を如何にすべきやの相談にあずかりました。

当時ライは遺傳病であると信ずるものが多く、その迷信を打破すると同時に政府に対してライ予防に関する法律の發布を催促し、遂に明治四十年に成功し、その結果四十二年に公立療養所を全國五ヶ所に設立を見るに至りました。これはもちろん國家有司の努力によるものであつて。私はその間に微力を捧げることがで

きたのを光榮に存するものであります。

それから五十年、今日まで多くの理解者、共働者とともにライ問題解決一本の道を進んで來ました。当時市中に多く見られたライ患者が今日全く見られなくなつたことだけでも感無量のものがあります。この私の拙い生涯の記録が藤本浩一氏によつて、また医学上の覺書が内田守氏によつて記述され、朝日新聞社の好意によつて世に出ることになりましたことは私の無上の光榮であり、関係者の勞に対し心から謝意を表する次第であります。

昭和二十五年八月十五日

光 田 健 輔

目次

浮浪者の宿……………一

医者となるまで……………はじめて見たライ

菌……………最初の海浜療養所……………回春

病室……………澁沢栄一氏……………叱られた

話……………宗教的救済……………一人のペス

ト患者……………野宿をしても……………「残

月一声」……………尊き理解者……………法律

第十一号……………意外の襲撃

いばらの道……………四〇

待つていた困難……………こわされる塀……………

……………宿命的な出生……………性分離……………

優生手術……………ストライキ……………とば

く……………モルヒネ中毒者……………大風子
油……………虫に食われた茶の実……………院
長となつて……………歌舞伎劇團……………も
ろともにあわれと思え

園に花咲く……………八二

光明会の設立……………三つの案……………島
を求めて……………世界に叫ぶ……………秩序
……………奥秩父の夜……………「田母沢号」……………
……………園に花咲く……………新しい出発……………
……………偽名の客……………水……………ああ樂土

恵の鐘は鳴りわたる……………二五

盲目列車……………門戸開放……………長島へ
の道……………あふれる定員……………十坪住
宅……………ライ予防協会……………恵の鐘……………

…… 一万床 …… 無ライ縣運動 ……
…… 煙突男 …… 長島事件 ……

最後の一人まで

二六

残つてゐる浮浪者の群 …… ライ貧民街
…… 草津湯の沢 …… 墓場を宿とする
人々の群 …… 救ライの使徒は海を越え
て …… 中國百万のライを想う ……
ワゼクトミー第一號 …… 女ごころ ……
…… 苦難の友 …… 大豆の種 …… ラ
イ刑務所 …… プロミン …… 最後の
危機 …… よき師・よき友

ライ医学ノート

二五

浮浪者の宿

医者となるまで

私が学問を志して上京したのは一八九四年（明治二十七年）六月、清國との國交が危機を傳えられ社會は騒然としてゐる時で、東京へ着くと郷里の先輩である森靜雄氏を訪ねた。郷里を出る時、東京へ着いたら森家を訪ねて指導を受けるように知人から紹介狀をもらつていたのであつた。

森氏の長男林太郎（鷗外）氏は陸軍軍医であるがその文名はもう日本の文壇にたく傳えられていた。私はこの先輩の間われるままに上京の目的や故郷の話をした。

私の生れは山口縣の防府に近い中の關という古い港町で小学校はここで卒えた。小さい時から書物を読むことが好きで「日本略史」「十八史略」などの漢文、スマイルスの「自助論」の訳文などもそのころ特に面白くて何度も讀んだのであるが、漢籍の方がやはり讀む機会が多かつた。高等小学校を卒業してのち二年ばかり山口の錦川学舎という私塾に通つた。錦川学舎は英語、数学、漢文を教えたが、漢学の土肥周南という先生が陽明学者で

章句の末にこだわらず、先哲の精神と「知行一致」を強く説かれ、その教訓が長く私に強い感化を與えた。

十四歳の時父和七が亡くなつてのち、長崎で医学を修めて山口で医師を開業していた兄潤助の家で調剤を手傳いながら錦川学舎に通つたのであるが、いつまでも兄に頼つてはいけなと思つて兄と相談の上、独立して勉強することに決めて東京へ出る事になつたのであつた。

森氏から、

「正規の中学校の上級に編入して大学へ進むことにしてはどうか」

といわれたのであるが、私は、

「母や兄から金をもらつて勉強しようと思わないので、自立して学僕か何か働きながらその暇に勉強したいと思ひます」

と答えた。それから森氏の紹介で賀古鶴所という軍医の家に寄寓することになつた。

加古氏は当時陸軍軍医学校で衛生学を講義していた耳鼻科の大家で、歌人としても、のちには宮中御歌所の寄人となつたほどの文人でもあつた。家に訪ねて来る交友には森鷗外、落合直文、幸田露伴、尾崎紅葉、斎藤綠雨らがあつた。

間もなく日清戦争がはじまつたから賀古氏は戦地へ出る事になり、私は留守居役となつた。留守宅は老母と奥さん、女中など女ばかりであるが、自宅に治療をもとめて来る患者のために赤十字に勤めているお弟子さんが毎週火木土の三晩だけ診療の代役を勤めることになり、私は調剤をうけもつた。時々たいくつな老人のために雑誌や小説を読んで聞かせるほかは暇が多いので上野の図書館に通つて解剖学の写本を作つたり、医学、薬物の書

物を讀んでいたが、翌年の春には医術開業試験の前期試験をうけて合格した。

前期の試験に合格したとき日清戦争が終つて賀古氏は無事に凱旋した。私はこのとき思うところがあつて山口にいる兄に手紙を書いて、

「医者になるための前期の試験には合格したが、後期の試験を受けるためには現在の境遇ではむづかしい。したがつて独立の見とおしもつかないから専心勉学できるように下宿して一年ばかり済生学舎へ通いたい」

と傳えたところ、この手紙の返事として兄から金を送つてくれることになつたから賀古家を辞して下宿についた。下宿では自分の思う通り自由に勉強できるようになつたので済生学舎と上野の図書館に通つて約一年のち、一八九六年（明治二十九年）の十月一日医術開業試験後期に合格した。二十歳のときである。

済生学舎というのは東京で唯一つの私立の医学校で、校長は長谷川泰といい、自由教育を唱えて独得の風格をもつていた。人々は本郷鎮台などと呼んでいたが豪傑肌の人で、講義は朝の五時からガス燈を灯して始められ午後の八時まで続いた。その間、科目ごとに講師が交替するので学生はその科目を自分で選択して聴くのである。常に千五百人ぐらいの学生がいて出席も欠席も全然自由であるから在学十年、なお開業試験にパスしないような人もいゝ。怠け者も多かつたが勉強家も多かつた。のちにアメリカへ渡つた野口英世氏は私と同期で一八九六年の出身であり、東京女子医専の校長として令名高かつた吉岡彌生女史は四年前の一八九二年の出身であることをあとになつて知つた。

私は上京以來、暇さえあれば図書館で和、漢、洋書を問はず、医学に関する書物は一冊残らず讀むつもりで讀み漁つていたのであるが、書物というものは讀めば讀むほどわからないことが多く出てくるもので、書いてある

ことは理解できても、結局、得心のできない疑問が多くなつてくるのであつた。

國家試験に合格すると多くのものは雇われるか、開業するか、とにかく業に就くのであつたけれど、私は試験に合格したとき考えた。

「書物の上ではわかつたつもりでいるが、人体について、もつと実地の研究をしてみなければ、正しい医学はわからないのではないか」

それで、その疑惑を解くために東大の医学部に選科の学生となつて病理学の研究をすることにしたのであつた。

はじめて見たライ菌

東大ではそのころ医学部長は入沢達吉博士で、病理学教室には三浦守治、山極勝三郎教授がいたが、山極教授の敬虔な学者的態度には私は大きな影響を與えられた。この教室で解剖による病理研究のかたわら考えたことは「病理を究明するためには、病理教室だけの解剖ばかりで完全な結果は得られない。健康な普通の生理解剖と比較することによつてはじめて病理が明るくなるのだ」

さいわい、病理教室の向いが解剖教室であつて、解剖教室は廊下にもで普通体の解剖標本がたくさん陳列してあつた。それで暇さえあれば解剖教室の標本をのぞき込んだり、スケッチしたりするので、多くの学生のように

運動することも、煙草をすうて雑談するような暇もなかつた。

日曜も祭日も、研究自体がおもしろいので、別に趣味とか娯樂とかの時間を必要と思わず、夜になるとドイツ協学会校に通つてドイツ語の勉強をしてドイツの原書を自由に讀破しようと努力した。

そのころ、医学界、ことに海外の学界に大きな問題としてベルリンの國際ライ会議のことが新聞雑誌に傳へられていた。近代医学の祖國としてのドイツからのニュースはドイツ語の勉強かたゝもらさず讀むことにしていた。それによるとドイツ東部のメーメルという地方に二十数名新しくライ病が発生したが、原因を調べてみるとロシアに接しているリガ地方から雇われてきた女から傳染したということがわかつた。ドイツ、フランス、イギリスなどの文明國では殆んどライはなかつたのに、同時に二十数名が発病したというので、これは大きな事件と見られたのである。ある新聞は社説にそれを取り上げて、「かつて中世に人類を襲つた二つの恐るべき民疫があつた。その一つはペスト、それからレプラ、その民疫のためにヨーロッパ人の半数が斃れたのであるが、今の間にレプラを根絶しなければ再びあの慘事をひき起すであらう」というのでライへの対策がドイツで全國的な輿論となつた。そこでベルリンに國際ライ會議を開いてライをなくする手段を研究しようというのである。

この會議には細菌學者ローベルト・コッホをはじめ、各國から細菌學や皮膚病の第一人者が招かれて出席した。日本からはドイツに留學中の土肥慶藏博士が出席した。北里柴三郎博士は日本のライ統計を論文として提出した。このようにドイツでは三十名足らずのライが発生したといつて世界中の學者を動員して予防の研究をしているのに、日本ではどこへ行つても人の集まるところにはライの乞食が群がついていて誰も不思議に思つていなかった。恐れる様子もなく、遺傳だといつて一般社會はもちろん、医者でさえもかくべつ注意を拂つていない。大学

病院の皮膚科でも毎日二、三十人のライを診療しながら他の病者と別な取扱いをしていなかった。

それから、ベルリンのライ会議ではハンブルク大学のウンナ氏とプレスラウ大学のナイセル氏が、

「ライ菌は細胞の内にあつて核をおおっている」——ナイセル

「ライ菌は細胞の間隙の中にあつて繁殖している」——ウンナ

と菌の所在についてはげしく論争していることも雑誌に書いてあつたので、大学の主な学者にどちらが正しいか意見を聞いてみたけれど、はつきり答えてくれるものがなかつた。

それで私は、

「これは自分で研究してみるよりほか、正しく知ることができない」

と思うようになってライ菌についての学問的な興味がわきあがつてきた。

或る日、病理教室へいつものように養育院から死体が送られて來たが、甚だしく崩れたライであるので学生達は敬遠して手を出そうとしない。誰もやらないから私が死体をひき出して山極教授が執刀する解剖の介補に立つたのがはじめてライに触れた時であつた。その時、股の淋巴腺の一片をもらつて詳しく調べてみた。

この一片のライの淋巴腺こそ、私の最初の研究であるとともに、一生を決定する大きな動機となつたのであつた。その腺の切れ端を染色して顕微鏡で調べると全く結核の組織であつた。

しかしその腺は確かに結節ライの淋巴腺である。さらに進んでライ菌の染色をしてみると果していたるところにライ菌が見える。ライ菌と結核菌とが仲よく共棲していることがわかつたのである。

のちにこのことを東京医学雑誌に発表したのであるが、そのときにはまだ世界の何人もこの事実を決定するも

のがなかつた。

最初の海浜療養所

私ははじめから特に医者になろうというような強い希望もなかつたのであるが、東京へ出てのち環境が自然に私を医者にしてしまった。けれども私は町医者のような金もうけ主義はおもしろくないので軍医になつたら金もうけのことを考えないでその職を全うすることができるとも知れないと思つて、軍医監になつていた加古氏にその話をしたら、陸軍では軍医が余つてるので新しく学生を募集しないといわれた。そこで海軍軍医学校を受験したところ左眼の近視を発見せられて駄目であつた。

そのころ同じ病理教室にいた学生で開業するため郷里へ帰るという友達があつた。一日その学友が「僕が今まで勤めていたところへ後任として君を推薦しておいた。いいところだから是非引きうけてくれ」と藪から棒のよな話をするのでよく聞いてみると、彼は以前から大学の推薦で養育院に勤務していたのである。月手当十二円五十銭というのは決していい報酬ではないが、資料が多くて勉強できるというのである。

無理におしつけられた仕事で、見込まれた好意はありがたかつたけれども、私の一生の仕事の門に無理に押しやつたのは、互に意識はしなかつたが山崎筆三というこの学友であつた。

結局山崎氏の後任として東大医員、養育院勤務を命ぜられたのは一八九八年（明治三十一年）三月のことである。養育院は東京市立で院長は男爵澁沢栄一氏、私の属する医局は東大病院医長入沢博士の兼任、医員数名は大學から派遣せられているので、私もその中の一人として養育院に勤務することになった。

そのころ養育院に入れられている人々は孤兒、老人、行路病者など、独立して生活できない人生の落伍者で、およそ六百人ぐらいを養つていた。その中には子供が非常に多かつたが、行つてみると子供たちの中に肋膜炎や肺結核でたおれるものが多く、一ケ年の死亡率が五十七％に達している。このような状態をそのままにしておくことはできない。医者として最善の処置をとらねばならぬと思つてまず食料を調べてみると、幼兒にはうすい煉乳や雑炊が主食で副食物は少しばかりの野菜であるから、蛋白、ことに動物性の蛋白が非常に缺乏していることがわかつた。それから居室を見ると平均一疊に二人寝ているので密集しすぎている。したがつて室内の空氣が非常に不潔なのである。

「これをよくするためにはまず空氣の清澄なところへつれて行つて、何でもいいから動物性の蛋白を多量に與えなければならぬ」

と考へてその意見を入沢医長に話したら賛成してくれた。養育院の幹事安達憲忠氏に申し出たところ、安達氏はそれではどこへつれて行けばよいかと聞かれた。

スイスなどではダボスやアルペスの山間を結核療養の適地とし、海岸は風が強すぎるのでよくないといわれていた。しかし設備や交通などについて考えると山間部に療養所を作るとは経済的にむづかしい。海岸ならば魚がやすく買えるし、空氣も清潔であるから、東京に最も近い房州の海岸がよからうと答えたのであつた。現に私